

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2022

「しなやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第4回 11/11 (金) 13:30～15:00 報告

脳科学で考える、人との付き合い方

～思い込みや、偏見で人を判断してしまえば、世界は狭くなる～

講師 生島 嘉人 (本学准教授)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*

本日の講師は他人とのコミュニケーションの中で、感覚から認識へのプロセスと、その過程で生まれうる思い込みや偏見について話しました。

我々は五感を通じて世界についての情報を取り入れています。その五感は簡単に騙されます。人は感覚で受けた情報を経験に照らして解釈しますので、実際の状況より思い込みが優先することがあります。たとえば、今のマスク生活では人の表情がよく見えないため、コロナ禍による対人付き合いに様々な規制があり、話を理解する手がかりが少なくなっています。したがって、話し合っているときに、我々は思い込んでいる可能性があることを意識しないといけない、と講師は話しました。

講師いわく、「コミュニケーション」は情報の伝達や連絡、通信だけではなく、意思の疎通や心の通い合いという意味でも使われることを話しました。人間は言語のほかに、身振りや画像などの物質的記号も媒介手段にして、精神的交流をしています。

初めて会う人とのコミュニケーションは特に難しいです。威圧感のある人、見た目が怖い人、恰好が異様な人、外国人など、自分と違う人には話しかけにくいです。我々は外観や雰囲気などでコミュニケーションができそうか判断しがちです。しかし、その先入観に注意しないとイケません。「脳は意外とうそをつく！」と講師は言います。人間は思い込みのほかに、勘違いや誤解、錯視・錯覚、物忘れ、手品などに弱いです。

講師は感覚と知覚と認知の違いを説明しました。「刺激を受容し、中枢でそれを認めることを感覚 (sensation) といいます。質や強さを区別し、それらの時間的な経過を認めることを知覚 (perception) といいます。イクスカの知覚を総合して、知覚されたものが何であるかを認める中枢のはたらきを認知 (recognition) といいます」感覚を正確にとらえ、知覚しないと、誤った認知につながるというわけです。人間の感覚について、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のいわゆる五感のほかに、受容器が特殊化していない痛覚や圧覚、温度感覚、前庭覚、内臓感覚などもあります。しかし、その感覚を知覚と認知につなげていくためには、発達が必要です。(ここから、講師は話を見ることに限定して進めました。) 見ることは「目で」「手で」「肌で」「舌で」「音で」という感覚を総動員して「知覚・認知」し、フィードバックを受けて発達します。また、左右の目はそれぞれ脳の反対側に情報を送りますが、複雑につながっている中枢で処理されます。受け入れたイメージを過去の経験や常識、自分の願望などに照らしながら、環境情報や人からの意見、自分の想像を加味して知覚しますので、

誤解することがあります。これはいわゆる「見る」と「見える」の違いだと考えてもいいです。

我々はどの条件で騙されやすくなるかを理解してもらうため、講師はここで様々な錯視画を見せました。遠近感覚、輪郭の見方、画像の変化など、脳が期待する約束を破る画像を見て体験した受講生は、簡単に騙されていることに驚きました。

人の視覚認識には「見付ける力」と「見分ける力」というメカニズムが働かないと正確な認識ができません。しかし、期待や思い込み、情報の省略などのためのステレオタイプがメカニズムを狂わせます。偏見が生まれやすいことに気を付けなければなりません。

最後に、講師は表現について話しました。表現とは一般的には「意識をもって自分自身からアウトプットされること」といいます。歌や踊り、イラスト、絵、料理、言葉などは「表出」といい、自分の感覚を外部に出すことですが、表現はそれに加えて、ある目的意識をもって言葉などを利用することです。つまり、コミュニケーションは表現です。自分が行う表現は対象者のニーズに合わせて多くの技法を使います。逆に、自分で見る表現では、対象者の反応を観察し、身体表出と感情を見抜くことが必要です。人は表現を感覚を通して脳に取り入れますが、さまざまな理由で正確に知覚・認知されないことがある、ということを常に意識しなければなりません。コミュニケーションは思い込みと偏見を避けることにかかっています。

